

文東編『俳諧鑑草』

伊藤 善隆^a

^a 湘北短期大学非常勤講師

【キーワード】

俳諧 季寄 『俳諧鑑草』 希古庵文東 画一人汗虹

はじめに

美濃派の季寄である『俳諧鑑草』（個人蔵）を翻刻する。本書は、季語を十二ヶ月に分類・配列したもので、美濃派の季寄として注目すべきものである。

翻刻には野田治兵衛単独版を用いたが、本書には「東武十軒店野田太兵衛／京都寺町二条 野田治兵衛」の二書肆版があり、そちらの方が先行する版であるとされる。そのため、二書肆版（東京都立中央図書館東京誌料蔵本、国文学研究資料館所蔵マイクロフィルムによる）を参照したが、両者の本文に違いはないようだ。

『俳文学大辞典』（角川書店、平成7年10月）の「俳諧鑑草」の項目（小林祥次郎氏執筆）にも指摘されているが、本書の特徴の一つに、支考の『俳諧古今抄』の説が注記されていることがある。ただし、その説の引用にはまま誤字が見られるなど、やや厳密さに欠けるところがある。そこで、注記部分の翻刻に当たっては、『俳諧古今抄』を参照した。

また、注記同様、本文にも読みにくい箇所や誤字がしばしば目につく。たとえば、六月の「紙鹿」（十九才）の「鹿」は「漉」の

誤刻であろうし、「喜祥」（十九ウ）は「嘉祥」の誤刻と考えられるが、「喜」を誤っているだけでなく、原本の「祥」の字体も曖昧なものである。同じく六月の「伊勢祭礼」の説明は「十六日 此日僧尼詣」と読んだが、原本の「尼」の字の字体は、明確な文字の体をなしているとは言い難い。

そこで、翻刻にあたっては、『毛吹草』『はなひ草』『増山井』などの季寄類を参照した他、とくに白寿坊編『四季名類』（写本一冊、寛政十年奥、松宇文庫蔵、国文学研究資料館所蔵紙焼写真による）を併せて参照した。同書には、白寿坊の識語と書写者である周鶴の奥書が添えてあるが、白寿坊の識語によれば、「此一帖は、先哲の撰み置れし増山の井を用捨し、噫呻を潤色して、我か文庫にひめ置」いたもので、古くからの知り合いである羽州山寺の雲松窟周鶴に書写を許可したのだという。

『四季名類』は、『俳諧鑑草』と同じく、美濃派の季寄として貴重な存在である。たとえば、『俳諧鑑草』は一月に「蔭」という字を載せるが、この字は現代の一般的な歳時記や辞書類にも記載が無く、近世の季寄類を見ても管見の範囲では見つけることができない。しかし、『四季名類』を参照すると、やはり「蔭」の表記が見られ、「ヒジキ」とフリガナも付されている。そこで、あらためて古辞書を参照すると、易林本『節用集』に、「海鹿」^{ヒジキ}「鹿尾菜」^{ヒジキ}「鹿尾藻」に並んで「蔭」と記載されることが確認できる。

なお、編者の文東は、本所四ツ目（横堀とも）住の二千石の旗本、大嶋雲四郎である。また、跋を寄せた汗虹は、越後新発田の人で、元禄十二年生まれ、俗名を高橋治郎右衛門（玄武坊筆録『俳人名録』）、別号を信杖坊・画一庵・画一人・青雲叟といい、支考が新潟に来遊した時に入門し、その没後は盧元坊里紅に師事した俳人である。編著に『秋田路』（延享五年）・『杖のはじめ』（宝暦二年）・

『俳諧衆議』（宝暦七年）などがあり、安永三年二月二十二日に京都で客死している（以上、加藤定彦・外村展子編『関東俳諧叢書』第八卷〈青裳堂書店、平成9年2月〉、同第七卷〈青裳堂書店、平成7年1月〉）にそれぞれ所収される『葛の別』解題、『此秋集』解題を参照した）。

以上、簡単ではあるが、『俳諧鑑草』と、関連資料について解説を加えた。本書は、美濃派の作品を解釈する際には、まず参照すべき季寄であると言えよう。本稿で翻刻する所以である。

〈書誌〉

書型……小本一冊（刊）。袋綴じ。楮紙。

表紙……縹色原表紙。縦一八・二cm×横一一・四cm。

外題……表紙中央に「鑑草」と墨書（題簽欠）。

扉題……「鑑草」（一オ）、「四季名類」（一ウ）。

序文……「序（序題）」「寛延二_二年仲冬日／希古庵主人／文東」（年記・署名）。

版式……四周单边（一一・九cm×九・八糎。但し、第二丁表

内法を計測）。無界。每半葉八行。白口。下象鼻に丁

付（一（一三十三））。

跋文……「俳諧鑑草／跋 画一人汗虹」（跋題・署名）。

丁数……全三四丁（但し、最終丁には丁付が無く、裏表紙見

返しに貼り込まれている）。

刊記……「書林 京寺町二条／野田治兵衛」。

備考……扉右方には、魁星図が刷られている。

〈凡例〉

翻刻にあたっては、句読点を補い、改行を適宜改めた。また、

原本で小字双行で記された箇所は、「」内にポイントを落として示した（例、「門松かざり松」↓「門松「かざり松 かざり竹」」）。

片仮名は平仮名に適宜改めた。ただし、小字で添えられた助詞の片仮名や『俳諧古今抄』の引用部分の片仮名など、原本の表記を残した部分もある。

異体字等は、以下の通り、概ね通行の字体に改めた。例えば、「广」は、適宜、「魔」・「摩」・「麻」・「磨」に、「厂」は「雁」に、「決」は「決」に、「飭」は「飾」に、「愛宕」は「愛宕」に、「トモ」・「コト」・「ヨリ」の合字は「トモ」・「事」・「ヨリ」と改めた。ただし、一部原本の表記を残したところもある。

濁点は適宜補った。ただし、原本に濁点が付されていたものには、その傍らに「・」を付した。なお、原本のフリガナに濁点が付されていたものは、組み版の都合上、その字の前に「・」を付した（例、「かきや天瓜」）。

原本の各丁片面の終わりに当たるところに「」をつけ、（）内にその丁数および表・裏（オ・ウ）を示した。

誤刻と思われる箇所も原文どおりに翻刻し、適宜その傍に「（マ）」と付した。難読の箇所（字体が曖昧なもの）は□で囲んだ。

〈翻刻〉

（魁星図）鑑草

四季名類

「（一扉オ）
「（一扉ウ）

序

四季の名類を集める事は、連誹の家に専にして、発句にそれが時をたがへず、附句にそれが折をあしるふ。まして一巻の句数に至り

ては、例に月花の配りより、春秋の五句も夏冬の三句も、季と季を（一七）へだつる心得あり。尚はた首夏には花のすくなきより、牡丹、杜若を夏として、そこに四時の景物をあつかふ。今の俳式とてもその事にて、初冬に鳥のまれなればヒツキ鶉、シラサギ鶉の加減より、季となり雑となるもの、ごとき、一「理万遍の真享式に寄て、見る者の自在ならんにはと、」（一八）我党衆議して古抄を用捨し、是を鑑草といふ事しかり

寛延二二〇年仲冬日

希古庵主人

文東

「文東」(陰刻)「希古」(陽刻)「（一三）」（一三）

「（一三）」（一三）

春

正月「むつき 太郎月 端月 祝月 王春 孟春」元日「元三 元朝 初日 今朝の春 新玉 御代の春 花のはる 聖節」四方拝 菌固 鏡餅 楪 およこ草 菌朶 うらじろ 屠蘇 くすり子 朝賀「朝拜 小朝拜 奏賀」一院の拝礼 元日節会「諸司奏 七曜曆 氷の様 腹赤 国柄奏 ぐず笛」（一四） 年徳神 年棚「え方棚 え方」若夷 門飾 門松「かざり松 かざり竹」かざり繩「かざりわら 大飾 かざり炭」かけ鯛「にらみ鯛」飾海老 若水「つ、み井開 わか水桶」年男 初鶏 初鳥 はつ礼者「御慶」大服 雑煮 太箸 たはら子「生海鼠也」おし鮎 喰つみ 蓬菜「にし肴 数ノ子 田作 ことのばらとも ほだはら 榧 ちち栗 串柿 梅ぼし 橙 柚 柑子 橘 野老」弓始 馬乗初 着衣初「節衣」笑ひ初（一四） 遊び初 はつ曆 初夢 書初「試毫」諷ぞめ 松ばやし 年玉 福藁ヲ敷 毬打 遣り羽子 破魔弓 福引 宝引 湯殿初 蔵びらき 初荷 商始「店おろし」船乗初 おさがり「雨也」いねあぐる いねつむ「正月の寝起をいへり」子の日「小松引」

節餐（今式ニ云、此名ハ佳節ノ餐礼ナリ。正月ノ初餐ナリ。節事トモ、節人トモ。餐ノ字ノ略ハ俗習ナリ。或ハ二節ト云詞ハ）（一五）袴肩衣ノ威儀ヲ止テ、臨時ノ遊を云ヘリトゾ。或ハ朝拜ト云フ詞ヲ、三越ノ人ハ節ノ詞ト成ル。此等ノ俗習ヲモ知ベキナリ。本ヨリ俳諧ノ世法ナル、諸国ノ俗談ヲ知尽スベシ。一 卯杖「卯杖 御杖」朝靦の行幸「二日」臨時の客「二日」たうやく 八裏白 連歌「三日」白馬節会 万歳 鳥追 春駒 猿引 若菜 人日 七種「なづな はこべら 芹 仏の座 ごぎやう 鈴菜 すゞしろ 薺はやす 福若」 県召 松の内 庭竈 帳閉「帳紙うり」上元「十五日」御薪（一五）「十五日」かゆづえ 小豆粥「十五日 かゆ柱」左義長 賭弓「十八日」具足ノ餅「鏡直し」内宴「廿一日」藪入（今式云、古抄ノ二季ニ渡ル物ハ、藪入ヘ出替リノ類ヨリ、ヘ彼岸ヘ峯人ノ類モ、前後ト云、順逆ト云テ、春ト秋トヲ断レドモ、今ノ俳諧ノ省法ニヨラバ、秋季ニツレテハ秋トナシ、春季ニツレテハ春トナスベケン。タトヒ前句ニ藪入出替トアリテモ、附句秋ナラバ秋タルベシ。其季ヲ此季ニ連ル事ハ、皆々此例ニ效フベキナリ。仍テ此書、季節の跨リタル物ノ下ニハ春夏秋冬ヲ記ス。一 廿日だんご 東風 氷とくる「みてどけ」（一六） 雪汁 雪解（今式ニ云、解ルヲ春トナシ、消ルヲ冬トナス。消ルハ物ニ敵シテ消ヘ、解ルハ我ト解ル故ニ、冬春ノ道理ハ明カニ、一詞二用ノ自在ナルナリ。一 淡雪「今式ニ云、雪ノ斑ラナル形容ハ、初雪トモ云、薄雪トモ云ハン。春ノ雪ノ平白ナランモ、日影ニ散リテ淡薄ナランモ、寒氣ノ淡和ナル故ナレバ、決シテ春ト定ベシ。一 余寒 さへかえる 木芽 下もへ 芥子の若葉 松の花「若まつ 若緑」 福寿草（一六） 露の芽 姫がはぎ 若草 蔦菜 水菜 芹 角くむ苜 野老 山葵 水ぬるむ 暖海苔「桜海苔 甘のり 海髪 磯 海雲 青海苔 和布」 木地爐縁（今式ニ云、風爐ヲ夏ト成シ、爐開ヲ冬トナシ、今ノ爐縁ヲ春トナセレバ、朝茶ノ湯ハ、朝貝ノ例ヲ仮テ、秋ノ用トナルベキヤ。茶人ノ家ニ尋ベシ。一 三ヶ月ニ渡ル物 佐保姫 長閑 霞（一七） 鶯 百千鳥 杲鳥（ハ） 駒鳥 柳 椿 干大

根 干蕪 蜆 葩煎^{ハセ} 山椒皮 干鱈 蛤 鮒 鱒
祭事会式

祇園削掛「元朝寅刻」舟玉祭 初寅參「春おろし」愛宕天狗宴^{サカモリ}「二日」箕尾富突「七日」葉摘川神事「七日」大元師ノ法「八日」夷祭「十日」常陸帶「十日」鹿島「御齋会内論議「十四日」(ウ七)男踏歌「同」あらばしり かざしの綿」花燈夕「十五日」平岡御粥「十五日」河内「獅子頭ノ神事「十六日」厄神參 巖嶋祭 吉田ノ清祓「十九日」御忌「廿五日」箱崎八幡祭「十五日」

二月「きさらぎ 如月 夾鐘 中和節」

吉野の餅配^リ「二日」二日灸 出替^リ「春秋」社日 貝寄風 隴月 雉^一「(ハ)水鳥囀^ル 鷹化成鳩 鹿ノ角落 彼岸^一「春秋」鳥ノ巢 継尾鷹^一「朝鷹」聞居鳥 雁^一「春秋」燕^一「春秋 今式三云、雁ト燕ノゴトキモ、二季ニ跨テ用ベケレド、其外ノ鳥類ニモ、来ルト云ヘバ秋ニナリ、帰ルト云ヘバ春ニナル物多シ。当句ニ帰来ノ意ヲ忘レズ、春秋ノ二季ニツレスベシ。ヘ椋鳥、ヘ椋鳥ノ名ヨリヘ菊イタギキモヘ豆マハシモ、ヘ山雀、ヘ日雀、ヘ四十雀ノ類ハ、秋ノ方ニモ耳ナレタレバ、是ラハ帰ルトモ行トモ断リテ、春ノ方ニモ用ユベシ。ヘ駒鳥ハ決テ春ナレド、渡ルト云テ秋ニ用ベキヤ。或ハヘ鶴、ヘ鴨ノ類ヨリ、ヘ目白、ヘ頬白、ヘ瑠璃、ヘ鷓胡、ヘ鷓、ヘ鳴、ト云類ハ、一句ハナレテハ」(ウ)雑トモナスベク、春秋ノ季ニツレテハ、帰来ノ二字ヲ断ラズ、其時其句ノ季トナスベシ。」雲雀^一「笛」松むしり鳥 鳥さかる 雀子 猫の恋 鳴鳥狩 蝶 蛇 蛙 馬刀 蝮 寄居虫 飯鮓 田にし もろこ鮠 接木 初桜^一「山桜 いせ桜 江戸桜 姥桜 普賢象 楊貴妃 墨染 桜 犬桜 塩かま」初花^一「花の山 花園」苗代^一「同夷」陽炎 焼野 田打 畑打 畔塗 種蒔 独活 土筆 青芥子^一「(九) 杉菜 防風 蓮ノ根掘 蓮植^ル さいたづま 草かうばし 鬮草 蔦 若芽 菫 菊苗 蕨 菜の花 大根ノ花 葎類^一「薤^{ニラ} 蒜^{ニンニク} 茗葱^{アサツキ} 角葱^{ヒトシロ} 葱 刈葱 根

深ハ冬、ネギトハ東詞ナリトゾ。」薊 狗背 芽花 苜 鳳巾^一「いかのほりたこ」

祭事会式

稻荷祭「初午」東福寺懺法「初午」春日祭「上申」釈奠^一「上丁ハ春秋」韓神祭「上丑」祇園御八講「八日」(ウ九)大原野祭「上卯」祈年祭「四日」薪ノ能^一「五日ヨリ十二日」涅槃会^一「仏ノ別」嵯峨柱炬^一「十五日」積塔^一「十六日」常樂会^一「興福寺 十五日」浅間祭^一「廿日」北野御忌「廿五日」菜種神供^一「廿五日 北野」稻垣^一神事 御棚昇^一「上日」^一季ノ御読経 時宗躰念仏

三月「弥生 花見月 姑洗」

桃花ノ節 桃ノ酒 草餅 曲水^一「(オ) 雛^一「祭 遊」鶏合 汐干 硯石取^一「土佐」永日 遅日 梨花 黃梅 連遶 海棠 楊梅花^一「辛夷 林檎の花 つ、じ 木蓮花 木瓜花 杏ノ花 結花^一「郭公」今式ニ云、漢家ノ詩ニハ杜鵑トモ蜀魂トモ云テ、何レモ暮春ノ景物ナレバ、幸ニ其例ヲカリテ暮春ノ用トナスヘキヤ。本ヨリ鶯ノ巢ニ結ハ、決テ春ト定ヘシ。此式ハ例ノ加減ナリ。」蘇枋ノ花 小米花 檜ノ花 庭桜^一「(ウ) 棗花 馬蘭 九輪草 赤南花 山梨ノ花 眉作の花 あせほの花 桜草 柿ノ塔 枸杞の花 吾妻菊 かうらい菊 ゑびね 金鳳花 けまん 丁子草 なもみ草 虎杖 三葉芹 茗荷茸 雀成蛤 田鼠成鶉 鳥ノ巢 呼子鳥 雲ニ入鳥 鳥帰^ル 麦鶉 上籜 柳鮠 桜うぐひ 桜魚^一「(オ) 桜鯛 さくら貝 若鮎 蚕飼 春雨 搔餅^一「げんげ摘 野遊^一「春秋」青麦 別レ霜 柳絮 藤 山吹 茶摘 爐塞 行春 三月尽 祭事会式 巳日祓 薬師寺最勝会「七日」峯入^一「春秋」石清水臨時祭「中ノ午 南祭共」鎮花祭 石山祭 水尾祭「五日」高雄法花会「十日」安良

花「同」(廿一) 粟津祭「三日」 壬生祭「十四日ヨリ廿四日」 比良祭
「十五日」 勸学会 千本念仏 御身拭「十九日」 浅草祭「十八日」 江戸
御影供「廿一日」 稻荷御出「中午」 隅田川大念仏「十五日」 墨直し
「十二日」 双林寺」

夏

四月「卯月 首夏」

更衣 白重 青簾 拾「夏 秋」 綿脱 卯ノ花 若葉 残花「今式ニ
云、此詞ニハ古今ノ論アリ。然レドモ、残ノ字ハ其季ヨリ此季ニ残ラネバ、残ト
云ヘル道理ナシ。花ハ本ヨリ春ニ決テ、残ハ夏ト定ヘシ。惣テ、残蛩、残菊ノ類モ、
古式ハ一様ナラヌ故ニ、十品ハ十色ニ覚兼テ、百世ニ論ヲ断ル時ナシ。譬ハ、残
菊ノ重陽ニ残ル共、残蛩ハ何ニ残ベキヤ。残ノ字ハ、総テ其季ノ次ニ取りテ、」
(廿二) 此論ヲ残ノ字ノ例トスヘシ。一 牡丹 杜若 葵「から葵 ぜに葵」 山
藤 一八 芍薬 ふのり干 芋植 苔の花 玉卷芭蕉 射干
薔薇 けしの花 風車 踊花 若楓 茶ひき草 花柚 夏木立
茂リ 麦秋「麦刈 麦わら笛」 桐の花 美人草 柑類ノ花 茨の花
きこくの花 蒔 手鞠花 白丁花「(廿三) 藪椿 しゆるの花 岩
梨子 竹ノ子 蓼 蓮のはな「若根」 郭公 羯鼓鳥 鶴 行々子
蝙蝠 蜘蛛の子 棒ふり虫 蠅取蜘蛛 蟹醢 煮酒 青嵐 青山椒
塩鳥賊 鹿の袋角 鷹峙ニ入 卯花降シ 短夜 新茶 古茶 老鶯
新式ニ云、此式ハ全ク新撰ナリ。老鶯トハ本ヨリ漢家ノ詩ニ出テ、或ハ狂鶯トモ、
乱鶯トモ、総テ暮春ノ物ナレド、例ニ今式ノ加減」(廿四)、残鶯ハ勿論ニテ、老鶯
モ夏ノ名トナサバ、鶯ニ老ノ感情アリテ、風雅ハ例ノ淋敷味ト云ハン。」 鶯ノ附
子「今式ニ云、此式ハ例ノ当用ナリ。今按スルニ、鶯ノ子ハ春巢立テ、夏飼ヘバ
六月ノ間ニ毛ヲ替テ、冬至ノ比ニ鳴習フ故ニ、鶯ノ子ニ鳴ノ字ヲ結テ、冬季トハ
ナセルナリ。然レバ、夏ハ聞習ニテ、或ハ引鳥ノ親ニ付ケ、或ハ笛ヲ以テ引音ヲ
教エ、稽古ハ夏ノ間ナレバ、附子ハ決テ夏ト云イ、笛ヲ結テモ夏ト知ベシ。」

」(廿二)

三ヶ月ニ渡物

扇子 団扇 蚊ばしら 蚊遣り 蠅 干鯪 干鱧 風炬「夏 秋」
(廿四) 晒「夏 秋」 鵜川「夏 秋」 鮎「春 夏 秋」 鮎「夏 秋」 鯉
「夏 秋」 川狩「夏 秋」

祭事会式

主水司始テ水ヲ供ス「二日」 孟夏旬「同扇ヲ賜フ 扇ノ拜」 筑摩祭
「二日」 稻荷祭 大神楽「卯ノ日 三輪」 比良野祭 松尾祭 当麻祭
杜本祭 当宗祭 水尾能「南都」 広瀬祭「四日」 竜田祭 山崎口、
使「三日」 八瀬まつり」(廿四) 山崎祭 多賀祭 灌仏「八日 仏生会」
嵯峨祭 手安天神「近江」 神衣祭「九日 伊勢」 日吉祭「中ノ申 山王」
中山祭「中西」 吉田祭「甲子」 あふひ祭「中西」 関白加茂詣「中申」
三枝祭 千团子「十六日」 向日明神祭 久世祭 清水地主祭「九日」
当麻法事「十四日」 大塔会「天王寺」 日光祭「十七日」 菅ノ宮祭 花
供「廿一日」 粟津ノ神供 神祭「忌さず」 風神祭「七日」 大津賢木
「三日夜」(廿五) 御蔭祭「中午」 馬ノ頭「同」

五月「皐月 蕤賓」

端午 菖蒲茸「菖蒲酒 同湯」 あやめのかづら 菖蒲刀 葉玉 葉
日 幟「男飾 印地打 せうぶ打」 粽「笹粽 菰粽 角粽」 芥人 騎射
水馬 競渡 葉草摘 競狩 競馬 帷子「辻が花 単物」 五月雨
雨蛙 梅雨「(廿五) 徽雨」 真菰刈 紅花摘「紅花 末摘花」 樗花
栗花落 藻ノ花「藻刈」 百合 箒草 さるとりの花 紫陽花 花
せうぶ 萍 萱草花 下野の花 石菖 夏菊 金銀花 金仙花
朝露草 天蓼 覆盆子 蚊屋つり草 かたばみの花 橘 南天の
花 合歓花 青山椒 くちなしの花 蕙 あかざ 青梅「(廿六)
若竹「今年竹」 茄子「花」 胡瓜 早桃 早松茸 杏子 生胡桃 枇
杷 菟 青柚 花柘榴 榲ノ花 早乙女「田歌」 田植 早苗取 青

田 田草とり 粟蒔〔種 胡麻等〕 そら豆引 籩打 蟬 蝸牛 螢
水鶏 羽拔鳥 翡翠〔今式ニ云、此鳥ハ詩ニ名アリテ、古抄ハ渡鳥ニ入タレド、
夏ノ谷川ニ木陰ヲ伝テ、決テ夏ノ姿トイハン。川蟬トモ。〕〔廿六〕 鳩ノ巢〔今
式ニ云、鳥ノ古巢ハ総テ去物ニテ、其巢ヲ掛ルル時ハ夏ナレド、浮巢決テ夏ト定ベ
キヤ。巢ニ用ナキハ句作ニヨルベシ。〕 水鳥ノ巢 鶉ノ巢 獸狩〔ねらひ狩
照射 火串 夜興引ハ冬。〕 鹿ノ子 小鱈 大角豆 まゆ取 虎ガ雨
五月晴 松竹ノ落葉〔今式ニ云、古抄ニ松竹ノ落葉ハ雜ナリ。常盤木ノ落葉ハ
夏ナリト云ヘレド、松竹ハ何ニ常盤ナラヌヤ。山館ノ風情ニハ、殊ニ面白キ物ナリ。
二品ハ決テ夏ト定ベシ。〕 蓮〔水芙蓉〕〔廿七〕

祭事会式

加茂ノ足揃〔一日〕 松本祭〔同〕 藤森祭 競馬〔五日〕 左近真手番
〔右近馬場 ひおりの日〕 室明神祭〔十三日〕 今宮祭〔十五日〕 両社祭
〔廿三日 坂本〕 有無ノ日〔廿五日〕 住吉御田植 大原祭〔廿八日〕 祇
園御輿洗〔晦日〕 御霊会〔九日〕

六月〔水無月 林鐘〕

〔廿七〕

水室〔水室ノ御調 水のおもの〕 水餅 〔困室壳〕〔廿八〕 一夜酒 簞 竹夫人
〔抱籠〕 日傘 汗拭 雲ノ峯 涼風〔風薫〕 清水〔泉〕 夏切茶 暑
葛水 心太 浅茅酒 水飯〔干飯〕 晒井 瓜〔真桑 白うり〕 納涼
煮梅〔梅漬〕 梅むき 楊梅 李 林檎 百日紅 撫子〔石竹〕 沢濁
菱ノ花〔実ハ秋〕 河骨 蒲ノ穂 海松〔秋人〕 荒和布 竹皮取 蘭
刈 つりがね草 眼皮 凌霄 鷺草 ぎぼうし 風蘭 きりん草
紫蘇 青鬼灯 茗荷 葛ノ花 棉ノ花 糸瓜ノ花 ゆふがほ 昼がほ
手まり花 桜麻 鷹羽遣ひ習ふ ひばり鷹 練雲雀 夏虫 雨乞
海月取 鯖釣 香薷散 夕立 土用干〔廿九〕 醬油作リ 蚤 毛虫
紙鹿草〔楮 かうぞ〕 藍刈 冲鱈 冷汁 麦 今式ニ云、此二品ハ、京
家ノ式目ニ、多ハ秋ノ季トナセルハ、察スルニ冷ノ字ノ感ニヤ。夏ハ涼ヲ好ミ、

秋ハ冷ヲ悪ム。天地自然ノ道理ニシテ、此等ハ夏ト決スベシ。惣テ、古今ノ違トハ、
天理ノ姿情ヲ論ゼズシテ、文字言語ノ名ヲ認ル故ナリ。是ヲ千式ノ凡例ト知ベキ
ナリ。一

祭事会式

六月会〔四日〕 解斎御粥〔十二日〕 祇園会〔七日ヨリ十四日〕 津嶋祭
〔十三日 十四日〕 熱田祭〔十五日〕 竹生嶋祭〔十四日〕〔廿九〕 藤嶋
祭〔十五日〕 三王祭〔同 江戸〕 伊勢祭礼〔十六日 此日僧尼詣〕 相国
寺懺法〔十五日〕 博多祭〔十六日 十七日〕 喜祥〔十六日〕 志渡寺祭
〔十七日〕 鞍馬竹切〔廿日〕 御手洗詣〔廿日ヨリ卅日〕 天満天神ノ御
祓〔廿五日 天満祭也〕 橋立祭〔廿五日〕 愛宕千日詣〔廿四日〕 大祓
〔卅日〕 大坂座摩祭〔廿二日〕 水無月能〔三日〕 住吉御祓〔卅日〕 辛
崎参〔同〕 鎮火祭〔同〕 川社 御祓川 夕祓 夏神楽〔廿九〕 菅
貫 形代 茅輪

秋

七月〔文月 夷則〕

立秋〔今朝ノ秋〕 初涼 残暑 一葉〔廿〕 柳散 七夕〔乞巧奠 星祭
天河 妻迎舟 立琴 願ノ糸 梶葉 かし小袖 鵲橋 紅葉橋 年ノ渡 星合〕
養父入 七夕鞠 踊 生身魂 刺鯖 掛乞〔秋冬〕 つと入 扇子
置 初嵐 身入ム風 冷 朝がほ 木槿 夕良の実 草花 女郎
花 男郎花 萩 芭蕉 蘭〔ふぢばかま〕 小車 桔梗 槐の花
犬子草 角力草 薬師草 観音草〔廿〕 曼珠沙草 鈍豆 鬱金
花 灸花 芋葉 茗荷ノ花 垣豆 糸瓜 鼠尾草〔水かけ草〕 蓮ノ実
飛 天瓜 南瓜 西瓜 木瓜の実 常山花 稲の花 早稻〔春〕
仙翁花 花野 花畠〔今式ニ云、花壇モ花畠モ、決テ秋ニ定ベキナリ。花園
ト云ヘバ、草花ニ似タレドモ、園トハ仰ギ、畠トハウツムク。爰ヲ俳諧ノ姿ト云テ、
種々ノ理屈ハ今ノ用ニアラズ。コレ等ヲ今式ノヘ有用ト知ベシ。〕〔廿二〕 残螢

残蚊 蝻 蜻蛉 蝸 松虫 鈴虫 蟪蛄 虫〔虫籠 虫放 虫狩〕 簞
虫鳴 金虫 促織 轡虫 馬追虫 蛩 ぐさぎ虫 罽出〔鷹 鳥屋〕
勝リ 小鷹 鷹山別 初鳥狩 初鷹 鳩吹 燒米

三月ニ渡ル物

露 霧 稲妻 虫 角力 下り築 蕃椒〔トウガラシ〕 薄 秋風〔ウツク〕 月〔初月〕
小望月 十四夜 望月 十五夜 十六宵 十六夜 立待 十七夜 臥待
十九夜 上弦 下弦 桂〔花〕 今式ニ云、此名ハ今ノヘ当用ナリ。古式ニ春季
ノ説モアレド、地下ノ桂ニハ花ノ用ナク、和歌ニモ月ノ光ヲ読タレバ、例シテ月
ノ異名トナシ、秋季ト定レバ勿論ニテ、四季ノ詞ヲ結フ時ハ、四季ノ月ニ用ベキ
ナリ。然レバ、有明、既望〔イッポヒ〕ノ名ニ例シテ、日モ星モ二句去ベク、植物ニモ二句去
ベキナリ。一

祭事会式

北野御手水〔六日〕 本願寺籠花〔七日〕 文殊会〔八日〕 柏流
ノ神事〔四日伊勢〕 盆会〔魂祭 魂棚 蓮飯 麻木箸 迎鐘 迎火 六道参〕
り 高燈籠 切籠 撰待 草花市〔三井寺女詣〕 十五日 地藏祭〔廿四日〕
御霊御出〔十八日〕 みさ山祭〔廿七日〕 穗屋作ル 石取神事〔七日夜伊勢〕

八月〔葉月 南呂〕

八朔〔田面ノ日〕 彼岸 出替 駒迎〔駒牽〕 木犀花 立田姫 初紅
葉 漆花〔ウツヒ〕 鶏頭花 野菊 月草 金剛草 藍花 鶉草 鳶
来紅 沢桔梗 百夜草 葡萄 鬼灯 蔦 茴香〔ウソキヤウ〕 蓼花 鴨上
戸 からす瓜 あげび 種瓢 縷紅 日特花 芋 名月〔芋名月 新〕
月 けふの月 牛房引 牡丹ノ分根 薯蕷掘 棉〔とり〕 一モ、フク 茜
掘 葉掘 刈安 若炯草 藁〔オヒ〕 菜種蒔 間挽菜 初雁 鳴
鶉 檜鳥 椋鳥 菊いたゞき 山雀 日雀 四十雀 菱喰 わた
り鳥 豆廻シ 鶉鷹 鷹打 木啄 燕婦 色鳥渡 稲負鳥 鴨〔草〕

くさし餌 大刀魚 洪鮎 初鮭〔網釣 塩引〕 鱸 小鯛引 茸
狩〔茸取〕 松茸 松露 下り築 野分 初汐 肌寒〔漸寒 夜寒 朝〕
寒 冷 新蕎麦〔今式ニ云、此式ハ例ノ賞翫ナリ。如何トナレバ、菫ハ冬ニシテ、〕
喰フハ秋ナル、前後ノ働ヲ賞テナリ。一 砧 毛見 粟刈〔飯〕 案山子
鳴子 引板 稲刈〔稲見 稲コキ 稲杭 稲庭 粉白 落穂〕

祭事会式

水村祭〔一日 二日〕 堺天神祭〔三日 四日〕 北野祭〔四日〕 白髭開
帳〔五日〕 敦賀祭〔十日〕 司召〔十一日〕 八幡祭〔十五日〕 放生会
〔同〕 御霊祭〔十八日〕 箱崎祭 菅大臣祭〔十六日〕 桑名祭〔十八日〕
〔オチ四〕

九月〔きく月 長月 素秋〕

重陽〔菊重 きのこの日〕 菊〔きのこの宴 きのく酒 着せ綿 きのく合〕 梅嫌
色かえぬ松 野山ノ錦 拾 忍草 おもひ草 初鴨〔今式ニ云、此名ハ〕
全ク新撰ナリ。或ハ賞翫トモ、加減トモ云ハン。今按ズルニ、奉膳式ニモ雁鴨ト
並ナガラ、賞スル所ハ秋冬ノ差別有。去トモ、見聞ノ姿情ヲ論ゼバ、初雁ト云ヘ
バ風雅ヲ思ヒ、初鴨ト云ヘバ風味ヲ思フ。爰ヲ天眼トモ、天耳トモ云ヘリ。譬ヘ
バ初雁ト音ニ喚ドモ、風味ヲ先ニ思ベキヤ。鴨ノ冬ナルハ勿論ニテ、初ノ字ヲ添
テ秋ト成ベシ。一〔ウチ四〕 新酒〔古酒 煖酒〕 われもかう 尾花 うちら
枯 とろ、の花 南天ノ実 みづき 芦ノ花 老母草〔実〕 木ノ実
類〔栗 柿 榎ノ実 椎 柘榴 胡桃 榎 樺 果梨 梨子 仏手柑 榛 無花〕
実 蜜柑 久年母 柚 菜黄 金柑 橙 旃旦ノ実 後ノ月〔十三夜 豆名月〕
二夜ノ月 紅葉散〔今式ニ云、此詞ハ古式ヨリ且散ヲ秋ト云イ、散ト計ヲ冬ト〕
云ベシト。花ト紅葉ハ春秋ノ艶色ニテ、花ノ散モ春ナレバ、紅葉ノ散モ秋ノ管ナリ。
増テ、冬散ハ木ノ葉ト云テ、枯テ色ナキヲ用トセリ。此等ヲ古今ノ用捨ニシテ、
例ノ且ノ字ニハ及〔オチ五〕 間敷ナリ。一 柏散 大豆引 漆搔シ 柚味噌
鹿〔笛〕 尾花鮭 絃藻取 網代打 露時雨 柁かづら 紅葉鮒

遅稲「新米 古米」新錦 星月夜 年貢 行秋 九月尽

祭事会式

御灯 不堪田奏「七日」 桂宮相撲「八日」 舍利会「八日」 醍醐祭「九日」 御香宮祭「同日」(ウヰ五) 鞍馬祭「九日」 貴布祢祭「同日」 生玉祭「同日」 四宮祭「十日」 下鳥羽祭「同日」 住吉角力会「十三日」 宝市「例幣」十一日 白川祭「十三日」 岩倉祭「十五日」 小倉祭「十五日」 粟田祭「十五日」 一ノ宮祭「同日」 岡崎祭「十六日」 神田明神祭「十五日」 江戸「淀祭」廿二日 呉服祭「十八日」 波利女祭「廿日」 太秦祭「廿一日」 牛祭共「天満ノ鎗流馬」廿五日 木幡祭「廿四日」 逆髮祭「鹿ヶ谷祭」廿四日 北山祭「廿六日」 鳴瀧祭「(ウヰ六) 福王神祭」廿八日 諏訪祭「七日 長崎」 野々宮ノ別レ 住吉ノ神おくり

冬

十月「神無月 小春 小六月ハ俗習」

孟冬ノ旬「一日 天皇南殿ニ出御有テ節会アリ。三献ノ後、氷魚賜フ。」(ウヰ六) 残菊「今式ニ云、和歌ノ公式ニ、十月五日ヲ以テ残菊ノ宴ト云ヘレバ、宴ノ字ニ及バズシテ、決テ冬ト定ベシ。此等ヲ加減ノ用ト云ハン。残ノ字、総テ残花ノ例ニ效ベシ。」 初時雨 射場初 爐開 茶ノ口切 豕餅「玄猪」 困水仙 かへり花 枯野 枯尾花「今式ニ云、此名ハ古今ニ論アリテ、秋トモ冬トモイヘド、枯ノ字ヲ結テハ冬ト定ベシ。其故ハ、名ノ木ノ枯ルヲ冬ト成シ、名ノ木ノ散ルヲ秋ト成セル。散ハ色アリテ、枯ルハ色ナキ故ナリ。然レバ、名ノ草モ其例ニシテ」(ウヰ七)、枯尾花ハ決テ冬ナリ。」 冬瓜「今式ニ云、幸ニ冬ノ一字ヨリ、霜ヲ待テ賞スル物ナレバ、西瓜ヲ秋トナセル加減ヨリ、冬瓜ヲ冬ト定ベキナリ。」 冬牡丹 八手ノ花 石路ノ花 山茶花 斥鷃「今式ニ云、此式ハ全当用ナリ。古抄ニハ、秋ニシテ渡鳥ノ部ニ入タレド、山雀、日雀ノ類ニハ非ラデ、斥鷃ノミ物ニ連立ス。民家ノ軒ニ馴テ馬防ヲ伝ヒ、水棚ニ遊ビ声ノ清ミタルハ、殊更ニ寒シ。増テ、春婦ル姿モ見ネバ、決テ冬ト定ベシ。此等ヲ姿情ノ

例ト云ハン。(ウヰ七) 木兔「今式ニ云、此木兔モ例ノ新撰ナリ。古抄ハ秋ノ部

ニ入タレド、渡鳥ニモ非ズ、色鳥ニモアラズ。増テ、鳴声ノ物凄キハ、寒ヲ厭ヘ

ル故ニヤ。然ラバ、二字ノ加減ト云、夜鳴鳥ノ当用ト云、決テ冬ト定ベシ。」

落葉 木葉時雨 茶の花 枇杷ノ花 鶉 鳩「今式ニ云、鶉モ鷓ノ水ニ

夏冬ノ差別モ無ケレバ、巢ヲ結ズバ糞トモ云ベケレド、鳩ハ鳴声モ寒氣ニテ、俗

語ニ擡井トモ云フナレバ、俳諧ニハ名目ヲ自在ヲ称シテ、冬ニ用アラバ冬ニ用ベ

シ。」 蕎麦刈 柳枯 萩枯 水鳥「(ウヰ八) 柴漬 尾越ノ鴨 鶯ノ子

「鳴 笹鳴」 初霜 綿入 綿打「今式ニ云、古抄ニ綿ノコトハ分明ナラズ。或、

真綿モ木棉モ、総テ冬ナリト云ベシト。去ルハ、附合ノ害アラン。綿ハ本ヨリ雑

ニシテ、綿入ハ綿抜ノ対ナレバ、入ノ字ヲ添テハ冬ト定ベシ。或ハ、棉打ヲ秋ト

云ベシト。綿ヲ摘ト云、棉ヲ打ト云フ。打ハ棉ニシテ、決テ冬ト定ベシ。棉取、

新棉ノ外ハ、秋ニハアラズ。或ハ、綿帽子ハ衣類ニ非ズト云イ、綿ニ海鼠腸ヲ嫌

ノ類ハ、古今ノ違ナレバ、論ニ及バズ。然ルヲ、綿ト木棉トハ附テモ苦カラズト

云テ、蟹綿ト木棉トノ積文アレド、綿ト棉トハ莫堅ノ切ニテ、音訓トモニ替ラヌ

ヲ、何故ニ附句ヲ嫌ヌヤ。古抄ニハ此類アリテ、皆々論ズルニ暇アラズ。爰ニ、

此綿ノ一名ヲ挙テ、万法ノ凡例ト」(ウヰ九) 成サバ、其外ハ推テ知ベキ事ナリ。」

水魚 鮭 炭がま 網代守 麦蒔 櫓 北窓 落ノ塔「今式ニ云、此

名ハ例ノ賞詠ヨリ、村消ノ雪ニ結トモ、落ノ塔ハ冬ト定ベシ。然レドモ、落ノ花ハ、

漢ニ賈島ガ春雪ノ詩ヨリ、春ト云ハンモ宜ケレド、其名ハ指テ俳諧ノ用ナシ。落

ノ芽ハ但春ニシテ、一物ニ用ノ例ト云ベキナリ。」 冬籠 冬構 雪垣 寒

菊 雪ノ下 大根引「今式ニ云、此詞ハ冬ノ当用ナリ。大根ト略シテ、音語

ニ読ベシ。京家ノ大根引ニ效フベカラズ。牛房モ同ジ名類ナガラ、引ト云ハズシ

テ」(ウヰ九) 掘ト云、其名ハ秋ト定ベキナリ。」

三月ニ渡物

雪 電 霰 千鳥 鴛鴦 衾 蒲団 頭巾 鯉汁 納豆汁 生海
鼠 鱈 蕎麦湯 石花 根深 玉子酒 電酒 生姜酒 火鉢 巨
燧 埋火 鷹狩

祭事会式

神送り 神むかへ 冬季ノ祭〔下加茂〕^(ウケ) 達磨忌 維摩忌 金
比良祭〔十一日〕 芭蕉忌〔十二日〕 御命講〔十三日〕 十夜〔十五日〕
夷講〔廿日〕 大社神事

十一月〔霜月 雪見月〕

顔見^セ 髪置 芽張柳 室咲 神楽〔里神楽〕 葉喰 乾鮭 氷柱
凍 雪ノ竿 雪磔 雪やけ 雪仏^(オキ) 雪吹 追鳥狩 寒苦鳥
暖鳥 冬至梅 太山楮 人参引 生姜掘 初鱒 杜父魚^{カッソ} 鯨突
雪車^{ガレンキ} 雪沓 つなぬき 雪海苔^{ククロノリ}〔今式ニ云、此名ハ俗習ニシテ、或ハ
加減ト云ベキナリ。此物ハ北越ノ名産ニシテ、海辺ノ岩間ニ降積タル雪ヲ、波ノ
打浸ス拍子ニテ、疑テ海苔トハ成レリトゾ。然ルニ、雪ヲ黒キト訓ゼシハ、白ヲ
青トイヘル義訓ナラン。今按ズルニ、海苔ノ名ハ春夏ト渡レバ、雪海苔ヲ以テ冬
ト成サバ、例ノ衆議ニ及バズシテ、此等ヲ加減ノ当用ト云ベシ。〕^(ウキ)

祭事会式

新嘗ノ祭〔中卯日〕 豊ノ明ノ節会〔中ノ辰ノ日〕 宗像祭〔上卯〕 杜本
祭〔同〕 当麻祭〔同〕 卒川祭〔上酉〕 梅宮祭〔上卯〕 中山祭〔同〕
松尾祭〔上卯〕 大原祭〔中子〕 吉田祭〔中申〕 日吉臨時祭〔中申〕
加茂臨時祭〔中酉〕 東三条大神楽〔下卯〕 吹草祭〔八日〕 空也忌
〔十三日〕 大師講〔廿三日〕 御仏事^(オキ) 御シ祭〔廿七日 南都〕
宇賀祭〔三十日〕 三嶋西ノ市〔中酉〕 鎮魂祭〔中寅〕 御火烧^{ホシキ}

十二月〔臘月 極月 師走〕

乙子ノ朔日 早咲梅 早咲椿 鉢扣 掛乞 寒垢離 寒念仏 八
ツ目鱧 鵜巢^ヲ作 煤払 年ノ市 小松壳 葉竹壳 岡見 星仏壳
曆壳^(ウキ) 神皿壳 羽子板うり 破魔矢壳 年樵^{トシキヨル} 年忘 宝船
札納 衣配^ヲ 餅搗〔餅庭〕 餅花 年用意 追儼 節分 豆打 柀

指 厄払 節季候 年ノ関 年波 年ノ余波 年坂 年ノ尾 除夜
とし籠 春隣 春待

祭事会式

大神楽〔上卯〕 内侍所ノ御神楽 御国忌〔三日〕 御仏名〔被ノ綿 十九
日ヨリ廿二日〕 臘八〔八日〕 齋宮ノ絵馬〔卅日夜〕 和布刈ノ神事〔同〕
西宮居籠〔同〕 安居ノ頭八幡山

俳諧鑑草

跋

画一人汗虹

古今抄ニ曰、俳諧の式目は新式に寄らず、古抄を追はず、けふの世
法にたがはねば、その座に望み、其時にしたがひ、其故を論じ、
其為を明らかにして自己の理屈を^(オキ)とめざれとぞ。爰に、その
書の意にしたがひて、四季に今式の故をあかせる。すべては作者
の機変より一卷を調ふ為なれば、常に見馴聞なれたるものは、春
夏秋冬の時もあるも、一句離れては雑となさんに、我家の人は更に
いわず、他も又寛制の省法にならつて^(ウキ)、一座に妙句を害せ
ざれとなり。

書林

京寺町二条
野田治兵衛

〔表裏紙
見返し〕

〔付記〕

本稿は、科学研究費補助金（基盤研究（C））「享保・宝暦期俳
諧の新研究…芭蕉没後の「かるみ」伝播を軸にして」（研究課題番
号 16K02416、代表・佐藤勝明）の研究成果の一部である。